

# 光受寺通信

NO.175

Vol.1 発行  
発行元 光受寺



今年はずいぶん異常という言葉がふさわしいほどの暑さが続きました。

その主な原因であると思われるこの地球の温暖化現象を、あるテレビ番組での「メンテーターが「自業自得」という強い言葉で締めくくっていました。私も「なるほど」といつい領いてしまいました。が、どこか他人事のような受け止め方をしている自身に恥ずかさを覚えました。

事実、高度経済成長下において、その恩恵を大いに悦び、もつとつとつと夢を膨らませていたのは自分自身だったのです。か。

この「自業自得」という言葉が仏教用語であることは皆さんよく存じの事と思えますが、どちらかというと悪い意味合いで使われることが多いようです。しかし仏教的に理解すれば「自業」とは、自分の行い、「自得」とはその結果を言います。それが善悪に関わらず使われる言葉なのです。

仏教ではほかにも「因果の道理」「因果応報」として説かれています。が、やはり因果も悪いことも自業の自得だということなのです。

さて、「この地球の温暖化現象は人類も含め、すべての生物の、地球そのものの存続の危機が迫っている兆候である」という間違った見方があります。また、その自業の責任は人類に託されているという見方も間違っています。地球はひとつの生命体として躍らねばならないという理を責める時だと思ひます。

## 今月の掲示板

「寒いね」と話しかければ  
「寒いね」と応える人のいる  
暖かさ

俵 万智

真夏の今、季節外れの言葉なのかもしれませんが、これがあくまで譬えの言葉です。  
作者、俵 万智さんは現代歌人を代表する方で、『サラダ記念口』の著者としてよく知られています。とても平易な言葉で多くの感動を与えてくださっています。

身近に共感してくれる人がいてくれるからこそその幸せがしみじみと伝わってくる作品だと思えます。

仏教では「ともに生きる」ということを大切な教えとしています。が、「ともに生きていく」という素直な実感が「暖かさ」として受け止められたのでしよう。

## お知らせ

### 秋の永代経

本年は、毎年通例形式での永代経は執り行いません。  
午前 特別永代経 十一時より 一般参詣無し。  
午後 法話ビデオ視聴会 一時～二時まで。

### 学習会

●●●●月●●月はお休みにしました。  
●●●●月●●月はお休みにしました。  
※●月開催は、永代経午後の行事に統合しました。

### お寺サロ

●●●●月●●月はお休みです。(改めのお知らせです)



お盆に思う

浄土真宗のお盆は、お盆を縁として、仏様となられた亡き人を思い、亡き人がおられる阿弥陀様の浄土思う大切なときなのです。  
「前(まへ)に生まれん者は後(ご)を導き後に生まれん者は前(まへ)を訪(まね)ぐらえ」と親鸞聖人は『教行信証』の中で述べられています。

「つらいつらいつらいつら」とは「甲(か)つ、つまり亡き人を悲しみ傷むと理解されているかと思えます。それは決して間違いではありませんが、「つらいつらいつら」とはそれだけでなく先に逝(い)った人を問い尋ね、改めて出会う直(ただ)すことなのです。

「つらいつらいつら」とは「亡き故人に「初めて出逢ったような気がする」と。そんな思いになったことはありませんか。

## 眞宗十派の本山に

お参りしませんか。

私は数年前に、滋賀、福井県にある眞宗十派の内、5ヶ寺を口帰りでお参りしてきました。それぞれ由緒あるお寺として多くの参拝者が訪れていました。

近くでは三重県津市に高田派の本山もあり、どこかの旅行先との組み合わせにされてはいかがでしょうか。すべてを参拝されるには最低3日は必要となります。



木辺派 錦織寺(滋賀)

### 親鸞 聖人御由緒



浄土眞宗十派と本山	京都府下京区
浄土宗 西本願寺	京都市下京区
眞宗大谷派 (東本願寺)	京都市下京区
眞宗高田派 (母修寺)	三重県津市
眞宗松光寺派 (松光寺)	京都市下京区
眞宗興正派 (興正寺)	京都市下京区
眞宗木辺派 (錦織寺)	滋賀県野洲市
眞宗誠照寺派 (誠照寺)	福井県津市
眞宗出雲路派 (香壇寺)	福井県津市
眞宗三門徒派 (金原寺)	福井県福井市
眞宗山元派 (龍泉寺)	福井県鯖江市

## こんなこと学んでいます。

7月の学習会においては、歎異抄第4条の2回目を瓜生崇先生のユーチューブを観て学びました。

今回は「浄土の慈悲」ということではありましたが、前回の「聖道の慈悲」についての復習もかねて説明をいただきました。

聖道の慈悲については、お釈迦様の悟りとはどう違う内容のものであったのか

を通してとても分かりやすく説明してくださいました。

中でも大変印象に残った言葉は、お釈迦様の悟りの内容である「空」という言葉の説明でした。

この宇宙に存在するすべてのものは、それ自体で存在していることはなく、すべてのものが地球の誕生以来、長い年月をかけて互いに関係し合いながら、今ここに存在しているということ。しかも今現在も、ともに関わり合いながら存在しているということから、私というものを考えてみた場合にも、私は確かにここにはいるけれども私の体も、心もすべての関係性のなかで存在するのであって、「私が思っているような私」はもういないということだった。

それが「無我」であり、「非我」であり、「我は一切なり」に通ずるということでした。

しかし、ここで悟られたはずのお釈迦様に何故か苦しみが生じたのです。それはこの悟りが自分一人のものであることは本当の目覚めにはならないのだということでした。しかも誰に話しても解ってはくれないだろうというジレンマの中での苦しみだったのです。

そこへ現れたのが梵天という神様でした。梵天の強い勧めにより、お釈迦様は悟りの内容を聞かせ話す決意をされたと言います。

もし、この梵天との出会いがなかったならば、今に伝わる仏教はなかったと言われています。

その後、「浄土の慈悲」についての説明となりましたが、阿難尊者の話など大変興味深く聞かせていただくことができました。

### 「仏仏相念」

「法を聞く者と、説くお釈迦様の間に壁は無くなり、互いに同じ大きな力がはたらきあい、目覚まし合っていること」に気が付き、それをお釈迦様に申し上げ、お釈迦様を驚かせたということでした。

### 次回予定 第5条

親鸞は父母(ぶも)の孝養(きょうよう)うこのためとて、一辺にても念仏申したること、いまだ候はず。

そのゆゑは、一切の有情(うじよう)はみなもつて世々生々(せせしし)しようじょうの父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。云々。

### 御願い

新聞記事募集中！



内容は問いませんので、よろしくお願ひいたします。また、記事内容についての「意見などお聞かせください。」